

第81回企画展

「^{くわ}鋤・^{すき}鋤・^{すき}犁」

～田畑を耕す農具～



令和元年7月9日(火)～9月28日(土)

岩手県立農業ふれあい公園 農業科学博物館

農作業で使われる農具は、かつては農民自らの長い経験と知恵、創意工夫で作られてきました。専門の職人に一部加工を委ねることはあっても、最終的には農民自らの判断のもとに作られました。

日本農業の歴史の中で最も多く使われてきた農具は「鍬」^{くわ}と「鋤」^{すき}でした。中でも「鍬」は田畑を耕す、土を砕く、土を塗るなどたくさんの用途があり、こうした日本農業の特徴から『鍬一本主義』という言葉が存在するほどでした。

また、「鍬」や「鋤」には地域ごとに様々な形状のものが存在し、岩手県では独自に発展した「南部型鍬」^{なんぶがたくわ}や「南部型踏鋤」^{なんぶがたふみすき}が使われていました。

「鍬」や「鋤」が農作業の主役を担ってきた時代は、昭和30年代の高度経済成長期にまで及びました。現代では農業の機械化が進みましたが、今でも「鍬」は多くの農家で使われています。

今回の企画展では、田畑の耕作に使われた「鍬」と「鋤」、牛や馬に引かせて耕す「犁」^{すき}について紹介します。



抱持立犁



じょれん鍬



双用二段耕犁



備中鍬 (二股鍬)



鉄 鍬



ふぐし 南部型踏鋤

岩手県立農業ふれあい公園

農業科学博物館

北上市飯豊 3-110 TEL:0197-68-3975

開館時間／9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日／月曜日(月曜日が祝日の場合は直後の平日)

入館料／一般300円 学生140円 高校生以下は無料

団体割引等(20名以上)があります

駐車場／大型バス12台 普通車240台 身障者専用5台